

文化 第八十卷 第三・四号 一秋・冬一 別刷  
平成二十九年三月二十五日発行

ブリギツテ・シユミツツ先生の業績と学風

森 本 浩 一



## ブリギッテ・シュミッツ先生の業績と学風

森本浩一

東北大学文学研究科外国人数員のブリギッテ・アン  
ネマリー・シュミッツ先生は、二〇一七年三月をもつ  
て東北大学を定年退職とされる。この機会に、ドイ  
ツ語・ドイツ文学分野における先生の長年の研究・教  
育活動と本学への貢献について振り返っておきたい。

シュミッツ先生は、一九五二年、ドイツ連邦共和  
国ノルトライン＝ヴェストファーレン州デュッセル  
ドルフ市の生まれである。デュッセルドルフ大学（ハ  
インリヒ・ハイネ大学）でドイツ文学、英米文学、教  
育学などを学んだ後、英国の総合制中等学校でティ  
ーリング・アシスタントとして勤務。帰国後、八六年か  
ら八九年にかけて、デュッセルドルフ大学ドイツ文学  
科のヨッヘン・ヘーリッシュのもとで学位論文指導を  
受けられた。この時代のデュッセルドルフ大学文学部  
は、言語学のディーター・ヴンダーリッヒや哲学のマ

ンフレート・フランクなどそれぞれの分野をリードす  
る研究者を擁し、国際的に大きな影響力を持っていた  
が、ヘーリッシュも、フランス系現代思想も踏まえた  
先端的な文学研究を展開する新進気鋭のゲルマニスト  
として知られる存在であった。一九九〇年、論文題目  
「トーマス・マン『魔の山』における「思想の自由」  
」で学位を取得。これは翌年、エッセンのブラウエ・オ  
イレ出版社から刊行されている。

シュミッツ先生は博士課程在学中の一九八七年以  
降、英語・ドイツ語の教員としてデュッセルドルフ市  
の社会人向け高等教育に携わり、特に東ヨーロッパか  
らの移住者に対する「外国語としてのドイツ語」(D  
AF)の教育に取り組んでこられた。この実績も評価  
されて、一九九四年四月、東北大学言語文化部に外国  
人教師として採用されることとなった。この時期、全

学教育ドイツ語の教育環境は必ずしも良好ではなく、しばしば受講者が一クラス六〇名にも及ぶという状況であったが、シュミッツ先生は、一九九九年までの五年間、初修外国語教育に熱心に取り組まれた。山形大学、宮城教育大学などでも非常勤講師として教鞭を取っておられる。

この仙台での最初の時期、シュミッツ先生は、『ドイツ文学関連の研究を精力的に進め、ムージル』『トンカ』論、マン兄弟の日記の研究、ヘッセ論などを次々に発表しておられる。また滞日を契機に行われた比較文化論的な興味深い研究もある。「日本イメージと日本受容——ドイツ語テキスト選」(『東北ドイツ文学研究』四二号、一九九八年)がそれで、この中では、江戸時代に日本を紹介したケンプファー、シーボルトらの旅行記から現代の詩人・作家のエッセイに至る多くのテキストが論評されている。

一九九九年三月に言語文化部での契約が切れた後、半年をおいた同年一月、シュミッツ先生は、文学部の外国人教師として再び東北大学に戻られることとなった。前任のドイツ人教師の急な異動に伴う人事だったが、当時ドイツ文学専攻分野の主任教授であった原研二氏(故人)が、シュミッツ先生の文学研究者としての業績を高く評価して着任を要請したという経

緯がある。この後、二〇一七年三月の退職まで、文学部・文学研究科でのシュミッツ先生の在任は一七年半に及ぶ。なおこの間、大学の法人化以後、それまでの外国人教師という身分がなくなり、通常の職階への移行がはかられたため、二〇〇六年からは教授として文学研究科の研究・教育に携わってこられた。

文学部・文学研究科におけるシュミッツ先生教育活动は、学部の基礎専門科目から大学院科目まで多岐にわたるが、特色のあるものを挙げるとすると、ひとつは学部の発展科目の中で作家や詩人の日記を取り上げた授業がある。ゲーテ、トーマス・マン、カフカといった重要作家たちの文学と人間性を日記の講読を通じて明らかにしつつ、学生自身にもドイツ語で日記を書かせることで、表現力の向上にも配慮するというユニークな試みは、「シュミッツ先生の日記の授業」として学生にも好評であった。また大学院では、テキスト読解に加えて、文学作品の映画化もよくテーマとして取り上げられた。特に先生の専門であるトーマス・マンの主要作品は数多く映画化されているため、恰好の教材となったようである。このほかにシュミッツ先生には、文学部に課されている全学教育ドイツ語の授業も分担していただき、言語文化部時代から引き続いて東北大学における初修外国語教育にご尽力いただい

た。

文学研究科時代のシュミッツ先生は、専門であるトーマス・マン研究を中心とした数多くの論文を発表しておられるが、特に重要なのは、「トーマス・マンの亡命経験と亡命下での執筆活動」と題された一連の論考（『東北大学文学研究科紀要』六二〜六五号、二〇一二〜一五年）で、ここでは、マンの長編『ヴァイマルのロッセ』や『詐欺師フェリクス・クルルの告白』と亡命経験との関わりが詳しく検討されている。特に『ロッセ』の中に、従来言われてきたゲーテの影響だけでなく、ナチスによる迫害と向き合うマンの姿勢が描き込まれていることを明らかにした点は重要である。

マン研究に加え、シュミッツ先生の研究面での業績として忘れてならないのは、ブルクハルト全集に関する仕事である。二〇〇〇年、ベック社（ドイツ）およびシュヴァーベ社（スイス）による『批判版ヤークト・ブルクハルト全集』の刊行が始まったが、そのうちの第四巻『イタリア・ルネサンスの文化』を、沼田裕之東北大学教育学研究科名誉教授（故人）、原研二文学研究科教授（故人）およびシュミッツ先生による日本チームが担当することとなった。『イタリア・ルネサンスの文化』は、かつてドイツ文学研究室の教授

であった柴田治三郎が邦訳したことでも知られる文化史研究上の名著である。シュミッツ先生は、批判版作成作業の中で、スイス方言を含む原著ドイツ語の校訂を行うとともに、ブルクハルトが引用した著作の確認等の緻密な検証作業において日本人スタッフを支援された。ここから直接的に派生した論文として、「トーマス・マンの作品におけるヤークト・ブルクハルトの痕跡——ルネサンス・ドラマ『フィオレンツァ』を中心に」（『ブルクハルト論集』第七巻『汲み尽くしたい源泉』、二〇〇八年）がある。ブルクハルト校訂の仕事は、沼田・原両教授と共同して遂行された二〇〇七〜二〇〇九年度の科学研究費プロジェクト「19世紀のドイツ語の歴史記述と物語り記述の比較分析研究」（課題番号一九五二〇一八六）へと発展したが、途中、原教授が逝去されたため、シュミッツ先生が研究代表者として最終報告をまとめられた。

シュミッツ先生は日本独文学会が毎年一週間の長期日程で開催している「蓼科文化ゼミナール」や、オーストリア文学会主催の「オーストリア現代文学ゼミナール」に欠かさず参加し、シンポジウムの座長をつとめるなど精力的に学会活動を続け、日本におけるドイツ語圏文学研究の発展にも貢献してこられた。二〇〇八年には、ブルクハルト研究の成果をトーマ

ス・マン研究に取り込んだ論文「トーマス・マンの作品における「デモニーシユなもの」の現出形態——『ファウストゥス博士』を中心に」を、日本ドイツ文学会の雑誌『ドイツ文学』（第一三八号）に発表しておられる。

ドイツ文学専修・専攻分野の学生たちは、論文のドイツ語要旨を提出した後、シュミッツ先生からの修正指示で真っ赤になって戻ってきた原稿を書き直す作業に四苦八苦するのが常である。そこには、どんな稚拙なドイツ語文にも手抜きをせず対応してゆこうとするシュミッツ先生の教育的熱意が現れていた。授業以外の場でも、例えば、現役の大学院生だけでなく退職した教員なども参加する自由な勉強会「リテラリッシェ・トレフポイント」を長期にわたって主催するなど、ドイツ文学専攻分野の教育を側面から支えていたのだ。

シュミッツ先生は映画がお好きで、ドイツ映画を授業で取り上げられる機会も多いが、小津安二郎などの日本映画にも造詣が深い。ヴィム・ヴェンダースが小津に捧げた『東京画』という一九八五年の作品があるが、シュミッツ先生は、公開当時この作品を観たことが、日本に対して興味を抱くひとつのきっかけになったと語っておられる。先生の東北大学への奉職期

間は、合計すると二二年半に及ぶ。三十数年前『東京画』に接した時、仙台という日本の地方都市でかくも長い期間過ごすことになるうとは、おそらく想像されなかったことだろう。この間、シュミッツ先生は、ドイツ人らしいと言えば偏見かもしれないが、東北大学の外国人教師として謹厳実直にその職務を果たしてこの念を抱いている。

（文中、論文タイトル等の日本語訳は、すべて紹介者による。）